特別講演

安部元首相殺害事件があぶり出す統一教会

櫻井義秀

司会　では、時間となりましたので始めさせていただきたいと思います。本日講演をいただくのは、北海道大学大学院教授・宗教社会学者の櫻井義秀先生をお招きしまして、統一教会についてお話し頂きます。令和四年七月八日の安倍晋三元首相殺害事件以降、「統一教会」という名称に絡んだ様々な宗教問題・社会問題、私たち宗教者にとって常に気にかけていなければならなかった問題ですが、少し等閑視していたことも事実でありまして、今回、また浮かび上がってきたという次第でございます。そのことにつきまして、今日櫻井先生からご講演いただき、自省し、今後どうしていくべきなのか、改めて考えていきたいと思います。

ちなみに、櫻井先生、今年度から現代宗教研究所の特別研究員となっていただいておりますので、それもあって講演会が実現化したというところでございます。

それでは、最初に現代宗教研究所所長の赤堀所長から、ご挨拶いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

赤堀　よろしくお願いします。

今回の安部元首相襲撃事件、オウム真理教事件による宗教の危うさ、それからコロナ禍による宗教の無力感の広がりに続いて、第二次世界大戦後の日本の無宗教化の第三波ともいえる大きな波浪となって、日本の宗教界を襲っていると考えられます。現宗研のカルトへの取り決めは、一九九三年に、『新・新宗教ハンドブック』に統一教会を取り上げています。その後、オウム真理教事件を契機に、一九九五年の十一月に、脱カルト研究会、現在の脱カルト協会が設立に際し、楠山・赤堀が参加し、第一回目の会合は日蓮宗の新宿常圓寺において開催されています。

今、統一教会を巡って、宗教と政治、マインドコントロール、霊感商法など、幾つかのエレメントが混在し、錯綜しております。今日は脱カルト協会顧問、そして北海道大学大学院教授かつ日蓮宗僧侶でもあり、現代宗教研究所の特別研究員をお務めいただいている櫻井義秀先生においでいただきまして、短い講演の中で事件の理解を深め、そしてまた研究の一路とさせていただきたいと思っております。

櫻井先生、講演、よろしくお願いいたします。

司会　それでは「安倍元首相殺害事件があぶり出す統一教会の七十年　政治／宗教運動と資金調達戦略の変遷」というテーマで、ご講演いただきます。よろしくお願いいたします。

櫻井　よろしくお願いいたします。

はじめに　統一教会研究をどのように始めたのか

ただいまご紹介いただきました櫻井でございます。現在、仏道修行中で、まだ身分は沙弥でございます。この前僧道林へ行き、いろいろご指導いただきました。そして、信行道場を目指してもっとやらなければと思っていたところ、

今回の問題が突然生じ、それ以降、少し私の生活自体が変わってしまったところもございます。

例えば今日ですと、大学としては夏季休暇中ということで、本来であれば自分の研究すべきことをいろいろやっているはずですが、「ひるおび」などのＴＶ番組に出演して、今ここでお話しさせていただき、また四時以降、ＴＢＳの取材に応じて、その後また週刊誌の取材に応じる。毎日このような感じです。八月になってからはまだいいですが、七月の間は授業や大学の会議もかなり入っていましたので、どういうことになっていくのか、非常に心配して生活していきました。しかし、私自身こういう生活に徐々に適応し出して、何とかこなせるのではないかとも思っています。ただ、いつまでも統一教会の報道ブームの中にいてはいけないのではないかという気もしてきております。

取材を受けながら考えてきたことですが、統一教会に関わる問題のみならず、政治と宗教であるとか、様々な切り口があるので、色々な問題が一挙に噴出してきている状況です。では、一体どこが落ち着きどころになるのか、出口になるのかということを、報道関係者はほぼ分かってなく、そこを考えずに、毎日出てきた情報を基に番組を構成しているということが分かってきました。

ですから、私に、「次の日、空いていますか」と前日に聞いてきます。「空いている」と答えたら、いきなりここで番組が決まってしまうわけです。そして、「何をやるのですか」と聞くと、「素材を一日かけて集めます」と答えました。こんな感じで、自転車操業で報道番組は構成されております。最近は、取材される記者の方とかディレクターの方が、事前に勉強してくるようになりました。最初は何も知らない。統一教会とは何ですか?というところから説明して、いろいろやっていたのですが、それはあまりにも時間がかかりすぎるということで、「私、統一教会について本をいろいろ書いたりしていますので、それを買って読んでから来てください」と言うようにしました。

なぜかというと、結局メディアの方はいろんな形でこちらから情報を収集するわけですが、そこで終わってしまうわけです。こちらとしては、向こうから何か学習する意欲があまり感じられなかったものですから、一方的に情報を

搾取されているだけではないか、そういう感覚も持ち、ゼロから教えるのは、私は学生に限っている。すでに本を書いているので、そちらを読んでから来ていただきたいと言うようになりました。

それが『統一教会―日本宣教の戦略と韓日祝福』（北海道大学出版会）です。実は、二〇一〇年に刊行した本ですが、統一教会に関してはかなり包括的に書かれた本だと思います。すでに統一教会についていろいろ論じられていることは、もうかなり前から明らかになっていることだと取材される方にお話しすると、大抵驚かれます。この本にまとめた話というのも、もう一九九〇年代、二〇〇〇年代に、いろんな形で弁護士の先生方をはじめ、いろんな方が書かれていた、それを集大成したような本が二〇一〇年に出されています。これは中西尋子先生と一緒に、私が執筆したものであります。

統一教会がどういうふうに日本の中で布教活動を行ってきたのかという話を第一部に据え、ついで、統一教会の信者の方はどういうプロセスで入信していくのか、回心していくのか、脱会していくのかも説明しています。基本的に「カルト」とか「マインドコントロール」という言葉で一般的に説明することは、この本の中では行いませんでした。なぜかというと、「カルト」とか「マインドコントロール」という言葉は、非常に分かりやすいですが、実はカルト視されるような教団の入信のプロセス、回心のプロセス、脱会のプロセスは、教団ごとにそれぞれ違います。しかも、個人ごとにも豊富なバリエーションがあります。

ですから、そういった個別性に目を向けないで、カルトの大枠とか、マインドコントロールの大枠を当てはめていくと、一般的には理解しやすいですが、この方々が脱会する、あるいは脱会した後リハビリ期間を経て回復される際に、どうやったら回復してくのかというプロセスが見えてこなくなってしまう。この回復というのは非常に個人的な問題なので、そこを理解するためには、どういうプロセスでその人が入っていったのかに目を向けないといけないわけです。そういうことで、個別性に着目しながら研究をしてきたわけです。そういう意味で、信者の信仰史というこ

とも扱っています。

この本のもう一つ大きな特徴は、韓国に渡った女性信者の研究をやっていることです。中西尋子先生は元々韓国の親族調査を田舎でやっていたところ、日本から渡ってきた人たちがいることを韓国の方に紹介されて、会いに行ったところ、統一教会の女性信者であることが分かったということです。二、三人から話を聞いてきたということで、たまたま私が二〇〇〇年の初めくらいに、関西で開かれた「宗教社会学の会」の集まりの際に、中西先生と初めて会いまして、中西先生から今の話を聞いたわけです。

ぜひ、これについて調査されたらいいのではと強く勧め、それから中西先生が、韓国で現役の女性信者の方、これは統一教会の発表では約七千人、合同結婚式に参加した日本人女性信者で韓国人の男性に嫁いだ方、約七千人と言われていますが、この人たちが現在韓国に在住しているわけです。何人かは離婚して、あるいは旦那さんと一緒に日本に戻られた方もいらっしゃいますが、大方は今も韓国におられます。その人たちがどういう生活をしているのかも調べております。

ここで分かったことは、韓国での信者の生活、要するに韓国の統一教会と日本の統一教会とは、随分と違うということです。簡単に言いますと、献金の額も違いますし、日本で言うとこの霊感商法の問題は韓国ではありません。統一教会の報道の中で、日本だけが献金をし、霊感商法などで集めたお金を韓国の本部に送って、資金調達という面で非常に献身的にやっていると報道していますが、全くそのとおりでして、日本だけがやっています。

そして、韓国に渡った女性信者の方々は、もう献金のノルマから解放されます。そして自分たちで好きに暮らしていいといきなり言われるわけです。そうするとどうなるか、日本で維持していたような統一教会の信仰がすっと消えていく人が出てきます。要するに、ある種の強制というか、枠の中で維持されてきた信仰なわけです。この枠がなくなると信仰心がすっと消えていく。すっと消えていったときに、その方々は統一教会の現実を見るようになるわけで

す。そこでいろんなことに気づいていくわけです。

統一教会の特殊性、そして日本での統一教会の特殊性、そのことを私は中西先生と一緒に韓国に数回調査に行き、中西先生は田舎の方に、私はソウルの方で調査いたしました。そこで十数名の信者の方と話し合っているうちに、いろいろ勉強させていただいたということです。こんな形で、私は韓国の女性信者に加えて、日本で信者になって脱会された元信者の方から話を聞いています。中西先生は韓国で現役の信者から話を聞いている。この二つの話を合わせまして、いわば統一教会の実像というのを描き出そうとしたのが、この本の事です。まとめるのに約十年かかりました。

この本の社会的な反響ですが、今の統一教会についての報道を考えれば、あり得ないくらい静かです。『週刊読書人』で島薗進先生が、『読売新聞』で片山杜秀先生が書評を書いてくださいましたが、この二本しかないのです。『中外日報』で二本記事を書かせてもらい、あと『赤旗』もこれを報じてくれた、それだけです。

では、統一教会の問題がこの時期なかったのかというと、決してそんなことはありません。あったわけです。過去の問題も当然扱ってはいますが、要するにメディアは、統一教会に対する関心がほとんどなかったと言えます。

こういう時期だと統一教会はどう出てくるのかということです。

私が三月に本を刊行いたしまして、その本について『週刊ポスト』の記者が私のところまで訪ねてきてくれて、インタビュー記事を掲載してくれました。『週刊ポスト』という雑誌の読者傾向がありまして、こんな見出しをつけちゃったんですね。「韓国農民にあてがわれた統一教会・合同結婚式日本人妻の『ＳＥＸ地獄』」と。このあられもないタイトルで、『週刊ポスト』も売らなきゃいけませんから、中吊り広告で買ってもらおうと思ってこういうタイトルをつけたんだと思います。私は、こんなことは全然言わなかったわけなんですね。

中身としては、本の話と、私たちが話したインタビューの内容に基づいて、比較的忠実に韓国での実情というのを

書いて、七千人の日本人女性信者たちの中で、貧困問題、夫からのＤＶに悩む人たちとか、こういう人たちがいることを書いたわけです。

ところが、これに統一教会がかみつきまして、『週刊ポスト』と私に対して執拗な攻撃を仕掛けてきました。小学館の前で「統一教会員、韓国人を侮辱した偏向報道に抗議する」といったデモが行われました。これは、ソウルで数千人の人たちが日本での統一教会に対する偏向報道に抗議する形で行ったデモと同じパターンです。しかも、これは東京だけではありません。札幌でも行われましたし、他にも、京都、大阪、広島など、各主要都市でやられました。

それだけではありません。『週刊ポスト』小学館に対して裁判が提訴されました。統一教会に対して損害賠償の要求、そして謝罪広告を出せという裁判がありまして、約二年半続き、最高裁まで進みました。私はこの間、東京地裁に出廷しまして、証人尋問という形で統一教会側の弁護士から非常に根掘り葉掘りというか、失言を引き出すような質問をされました。小学館側の弁護士からは、とにかく余計なことは言わないということが裁判においては大事だなどいろいろ言われ、結局、一回の証人尋問のために、二か月の間に三回ほど東京の弁護士事務所に行き、予行演習などいろいろやったのです。

裁判の本番で、統一教会側の弁護士に言われたのは、「ＳＥＸ地獄」という文言でした。「ＳＥＸ地獄」ということを『週刊ポスト』は書いていますが、ＳＥＸ地獄というのが現実に存在するのか。そんなことは私の知ったことではありませんが、これを根掘り葉掘り言われまして、私が答えたのは「受験地獄」というレトリックもあると。だから、問題の深刻さとか、これを示すために「地獄」というレトリックを使われることがあると。これは現実にある地獄とか宗教的観念の地獄ではないという話を裁判所の中でいろいろやりましたが、結局この裁判は統一教会が勝ちました。なぜ勝ったのかというと、見出しです。この見出しは、統一教会の女性信者を確かに侮辱している部分があると。「あてがわれる」という表現とか、他にも幾つかありました。

しかし、私の書籍の内容とか、韓国での調査自体は、調査に基づいたものと評価できると裁判所は言っていますが、この事件において統一教会は勝訴した、とだけ言い、私の研究は事実無根の捏造されたものであると、その後ずっと言い続けることになります。

そして、こういった研究をする人間が、カルト問題であるとか、こういうことを大学の講義の中でやるというのはいかがなものかということで、学部長宛て、総長宛て、内容証明つき郵便で抗議の文書が何度も来ました。こんな形で、とにかく統一教会とは、強烈なリアクションをすることで批判を封じ込めるような団体だったのです。しかし、今回は世間から総攻撃を受けているので、何もできないということだろうと思います。

この本ですが、別の評価といいますか、現役の信者さんにも結構読んでもらったと思います。本自体は六五〇ページくらいあって、値段も五千円弱ですので、簡単に読める本ではないと思いますが、これを読んで、自分がいろんなふうに悩んでいたこと、これがすっと氷解した、こんな手紙をもらったことが何度かありました。

二世信者の方や中高年の方でも読まれて、北大出版会を通して私に電話されてきた方もおられます。書店で読んでいたら、「これ自分のケースだ」ということで、「ひょっとしたら私はだまされているのでしょうか」と電話をしてきて、確認される方がいらっしゃいました。その方といろいろ三、四十分話しまして、どうも一千万近く献金していることが分かったので、もしあなたが統一教会をやめて、そのお金を取り戻したいというのであれば、「知っている弁護士の先生がいるのでお教えしましょう」ということで紹介いたしました。こういうこともありました。

この本自体は、現在、三刷が全部売り切れになりました。現在、四刷目に入っていますが、私は大学の教員、先生方がそんなに買ってくれたとは思っていません。また、メディアの人間も買ってないと思います。では、誰が買っているのか。たぶん半分から三分の二くらいは被害者の方か、現役信者の方ではないかと思っています。

要するに自分の体験が一体何だったのかを相対化する、そういう書籍はあまりなかったのです。そして、これは成

年信者として入った人、中高年信者として入った人、あるいはその二世の人で入った人、いろんな入り方であっても、統一教会の教説から、儀式から、そして資金集めの活動から、韓国での生活から、全部説明していますので、分かるということではないかと思います。

それで、これは二〇一二年、今から十年近く前の講演で考えた話は、実は十年後の現在でもほぼそのとおりかと思っております。社会問題化する教団への対処について、結局研究者がこうした団体を調査するための理論とか方法論というのを、オウム真理教事件のときにかなり反省したはずですが、依然として持っていないのが実情です。

ですから、調査研究と称して教団に行って話を聞いてきて、典型的なそこで救われたっていう人の話を聞いてきて、これがここの信仰ですとか教説ですという、こういうタイプの研究が現在でも非常に多いのです。これは、よくよく考えたら、社会学で言うところのサンプリングバイアスです。これはなぜかというと、ここで救われなかった、あるいはひどい目にあった人は、教団から抜けているわけです。

だから、救われたという人や何らかのメリットがあってここに居続けている人しか、インタビューでは出会えないわけです。だから、そこで話を聞いてきて、これが事実ですというのは、やはりおかしい、一面でしかないわけです。そういう当たり前のことが宗教研究の領域では、依然として問題として意識されていない。空振り状態です。そして、現在に至っているわけです。

ですから、カルト研究とか、こういった研究というのは、宗教社会学の中で研究している方は私と中西先生、その他若干、もう五人もいません。ところが、「宗教と社会」学会という、私も会長をやったことのある学会がありますが、この学会は会員が五〇〇人以上います。だから、カルト研究は極めてマイノリティの研究であることが分かると思います。

そして、宗教者ですが、オウム真理教の事件もそうだったし、統一教会の問題でも、関わらない態度を持たれる方

が相当数おられます。なぜかというと、私たちは宗教者であって、カルトではない、こういう考え方なわけです。私は、この間というのはグレーゾーンがかなりあると認識していますが、カルトは扱わない。これはカウンセラーの方や臨床心理の方も同じようなこと言われますし、検察の方や行政の方も、要するに宗教とかカルトとか、民事的なことは不介入、こういう定番の言い方です。

法曹界、これは裁判の中ですが、人権とか社会的な秩序を守るための理屈がなかなかできていない状況は、現在、統一教会に対してどういう法律的な対応ができるか、かなり迷っている状態はあると思います。

後からお話ししますが、似たような霊感商法をやった明覚寺であるとか法の華三法行に対しては、検察は詐欺罪を適用しているわけです。ところが、統一教会には適用しません。明覚寺より二桁多い被害額を組織的な違法行為で生み出した統一教会がなぜ刑事罰の対象にならないのか。なぜなのかという問題は、依然として解決されていません。

メディアではやはり宗教をタブー視していた面があって、私はメディアの方と接してきてその感覚をよく感じてきましたが、大手メディアの人ほど、宗教団体を恐れています。宗教団体だけではなく、自民党清和会をすごく恐れています。だから、私がいろんなことを発言してもすっぽり削られて、無難なことしか載せない、大手新聞は大体そうでした。そこで、ネットニュースであるとか小さいメディアがいろんなことを書き出して、あ、何だ、書けるのではないかということで、それで今書き始めている。ＮＨＫですらそういう番組を作っている、こういう背景があります。だから、この動きができる前までは、メディアは相当に自重し、ある種の権力に対する忖度をしていたと思います。

行政は、宗教法人の活動に関して基本的に関わらないということですが、公益にならないような活動をしている団体がもしあったとしたらどうするのか、これは依然として考えられていません。統一教会が地方自治体に対してさまざまなアプローチを仕掛けていますが、この問題に対してはほとんど無防備です。

学校教育・大学教育も考えていますが、「カルトにご注意」と大学のオリエンテーションなどではやりますが、根

本的には自分の頭でものを考えていく思考力とか判断力を身につける必要があります。付け焼き刃的な「カルトにご注意」では、対処できません。しかし、思考力、判断力を身につけるような教育が、この十年、大学の中でできているのか、はなはだ怪しいところではあります。そんなことを言うと、天に唾するようなもので自分に跳ね返ってきますが、そうであっても問題は指摘しなければいけません。

世間では、デジタルトランスフォーメーションDX人材を育てるとか華々しいことを言っていますが、結局学生四十人、五十人に「あなた、新聞、今日読みましたか」と聞いても、誰も手を挙げません。「一月に、自分で自主的に本を読みますか」と聞いても、二、三冊読んだ人がいたら、かなりほめなければいけない。要は、デジタル情報を取得する、編集された情報しか受け入れていない。自分から情報を探しに行くようなことは、実はあまりできていない状況です。こんなことを十年前に考えていましたが、この問題は現在も継続していると感じています。

統一教会の概要

では、ここから統一教会の中に少し入っていきたいと思いますが、調査というか、研究をどうやっていくのだろうかと、皆さんも関心を持っているのではないでしょうか。宗教団体というのはどの団体も一定の規模になると、ピラミッド的な構造を持っております。統一教会で言えば、教祖、幹部がいるわけです。最上位に文鮮明ファミリー、韓国の幹部です。日本の草創期の人たちでここに食い込んでいる人もいますが、数はそんなにいません。

ここに直接インタビューとか、例えば統一教会の本部に行って調べさせてくださいというのは、あまりにもリスクがありますからできない。ここは聖典とか、説経集とかでこのクラスの人々の言説を確認します。教祖の文鮮明という人は生けるカリスマなので、自分の説教は韓国語バージョンですと約二百巻から三百巻くらい出しています。日本の版でも十数冊にまとめて出ています。これを見ると、統一教会の歴史というのは、かなり正確に書かれていると分

析できます。あとは、教祖一家とか幹部たちは閨閥を作っておりますので、そこで実際にどういう意思決定がなされているのかは、実はよく分かりません。ですから、これは信者の伝聞情報を基にするしかないわけです。

私が食い込めたのは、中間管理職のところです。ランクの総称である七七七（スリーセブンという）とか千六百って何かというと、合同結婚式に参加した人のカップル数です。七百七十七組カップル、千六百組カップル、そして桜田淳子さんとかが参加した一九九二年の三万組のカップルとかって言いますが、中間管理職はこのレベルです。

このレベルで、私をよく面倒を見てくださる方とたまたま出会うことができました。このスリーセブンと呼ばれる方は、いろいろ試行錯誤しましたが、元は原理研究会、あるいは地区教会の責任者をやって、統一教会系の企業の幹部でやっていた。五十代半ばくらいに日本の統一教会自体が、要するに韓国の幹部達にほぼ乗っ取られるような事態が生じ、その中で統一教会と距離を置くようになった方です。その人から情報をかなりいただき、韓国の幹部にもコネクションができて、ここからも話を聞くことができました。ですから、統一教会の初期の状態については、そういう方から話を聞けたことで理解できたということがあります。

広く調査できたのは、成年信者、在韓信者、あとは壮年壮婦という中高年の方です。私は裁判をやられた方を中心に、弁護士の方、あるいはカウンセラーの方から対象者の紹介を得まして、多くの方、約三十人から四十人の方にインタビューを行い、一番長い方で、延べ時間で三十五、六時間。五回か六回に分けて、一回につき、五時間ほど話を聞くという、いくらでも話す内容がある方でした。この最初の聞き取りで霊感商法のやり方とかを含めて、いろんなことを聞きました。他にも統一教会の中で霊能師役をやった女性から、いわば霊能師として一般の人をいかに落としていくのか（巨額の霊感商品を買わせたり、献金させたりする）というテクニックとか、そんなことも教えてもらいながらいろいろ調査をしてきたわけです。

そういうわけで、教団の公式文書に書かれたものだけでは、こういう団体の場合なかなか分からないと思います。

なぜかというと、文書に書かれたものは、非常に対外的に教団を良く見せようとしか書いていないわけで、実態というのはやはりある程度中に入り込まないと分からないわけです。

統一教会とはどんな宗教かということを簡単にお話したいと思いますが、統一教会がキリスト教系新宗教というのは、皆さんも聞いたことがあるのではないでしょうか。統一教会の教義を説明するには、一般のキリスト教における原罪と贖罪の話をしなければならず、まずは創世記から話を始めることにします。失楽園のエデンの園の話を物語として聞いたことがある人もおられるでしょう。キリスト教は人間が神から遠ざかったこと、これが罪の根であるとしたが、その罪を一人子イエス・キリストが地上に下りられて、十字架について人間の罪をすべてあがなう、贖罪する、そのことを信じること、贖罪された後に天に上げられた、イエス・キリストが天に昇っていったっていうことを信じること、これによって救われるというのが一般的なキリスト教の教説です。

ところが、統一教会はそういう考えではありません。クリスチャンが救われているのであれば、なぜクリスチャンで人を殺したりする人がいるのか。キリスト教国家が戦争するのかと。世の中の悲惨とか矛盾はなくなっていない。これはイエス・キリストの救済、贖罪に失敗があったからではないか。こういう言い方をします。この論法で責められると、ひょっとしたらそうかもしれないと思ってしまう人が、結構いると思います。

人間の限界とか、社会の問題とか、そういう発想をさせないのです。完璧な救済というところを考えると、実は人間は完璧に救済されていない。それはなぜかというと、救済の論理、摂理に問題があった。まだまだ実現されていないことがあったのではないかと、こういう話です。では、それは一体どうすれば可能なのか、人間の堕落というのをもう一回考えてみる必要があるというのが、統一教会の理屈です。

中世の宗教画でエデンの園がよく描かれるのですが、裸のアダムとイブの脇に、善悪を知る木が立っており、この木の実を取ってイブが食べます。この木の実を取って食べれば、目が開け、あなたはいろんなことを知ることができ

るということを、蛇が示唆している、こういう場面が旧約聖書の第一章、創世記の中にあります。

そして、この蛇というのが、実は人格を持っており、その正体はサタン、元々は天使であったが、堕天使のルシファーというサタンである。このサタンが木の実をイブに渡して食べさせたということです。さらに、単なる木の実ではありません。昔、山口百恵さん、皆さんの中で若い方はご存じないかもしれませんが、ある程度の方は知っていると思います。「青い果実」という歌を歌いました。あの時代は、果実とか木の実とか、禁断の木の実という言葉に、ある種の性的な意味合いを感じ取って、年配者がこんな若い娘にふしだらな歌を歌わせてけしからんとか、若い世代は山口百恵さんの魅力にクラクラとしたのではないかと思います。私もそのくちでした。ですから、これもそうである。木の実を渡してイブが食べたというのは、サタンがイブと性的な関係を結んだと統一教会は考えるわけです。

イブがこの木の実を自分が食べた後、アダムに渡したというのは、サタンと性的関係を結んだことを隠すために、アダムに食べさせた。論より証拠、食べた後、二人は目が開け、自分たちが裸であることに気づいて、下半身を隠したと聖書で書いてある。なぜそこを隠したのかというと、ここにおいて罪を犯したからという解釈なわけです。サタンの悪の血がイブを通してアダムに入ってしまった。人類はアダムとイブの子孫ですから、人類にはサタンの血統が全部流れていることになります。これが原罪であるというのが、統一教会の教義です。

私が今この話をしても、皆さんは何ばかな話をしているのかくらいに思われるのではないでしょうか。今は、四、五分でしゃべっているので全然感動しないと思います。これが二泊三日ぐらいのセミナーで語ってしまうと、皆さんそれなりに感動するのではないでしょうか。信者の方はそうやって、すごいことを聞いてしまった、大丈夫だろうか、こう思われた方も結構いると思います。

人類の血にサタンの血が入ってしまった、これをどうするのか。統一教会が考えたのは、イエス・キリストが歴史上現れたのは、もう一回神の血統を人間の女性に入れて、そして原罪のない子供を産む、これが目的だったと考えま

した。イエス・キリストは三十三歳か三十四歳で、十字架につけられて亡くなったわけですが、そうじゃない。本来はこの世に下りて、人間の女性を娶り、子供をいっぱい産んで、そこから原罪のない子供たちをいっぱい増やす、これがキリストがこの世に現れた目的だった。これはアジア的な人間観だとは思いますが、こういうことを言うわけです。そして、イエス・キリストはその目的を達成できなかったとしています。イエスの子はいませんので。

では、どうするのか、それは神様がもう一回キリストを遣わす。再臨のキリストがすでにこの世に現れている、こういう話です。どこにいるのか、何を隠そう、私がその再臨のキリストですというわけです。こう言われてしまうと、何を言っているのだと言いたくなりますが、キリスト、メシアである証明はなかなか求めることができません。ですので、この人が言っている、実はこれしか根拠がないわけです。

統一教会の信者の方は、いろんな教説を一斉に教えられてしまうので、本来立ち止まって考えれば論理的につながっていないと分かる部分でも、そこで立ち止まるチャンスを失ってしまっている。全体としてこれが真理なのかということになっていきます。

では、この文鮮明氏はどういうことをしようとしたのか。一九三〇年代の韓国にはさまざまな異端と呼ばれるキリスト教の新宗教がありました。文鮮明という教祖はこういった異端の団体を渡り歩き、先ほど私が説明したような教義や、どうやってその罪を消していくのかやり方を学んだ、真似をしたわけです。そして、接神派とか、聖主教会とか、腹中教とは何なのか、神の霊が女性について、女性と密接に関わることによって神の霊が自分の身体に入るという話です。これは具体的に言うと、場合によっては性行為を含みます。

こんな異端的なキリスト教というのがありまして、文鮮明さんが当初やっていたのは、自分のことを神様と自称していますから、神様の清潔な血、これを自分の信者たちに分けて与える。これは、「血分け」と言われていました。まずは信者、女性信者と性的な関係を成立させ、その女性信者が男性信者と性的な関係をまた成立させるという形で、

一種の浄化をやっていったということです。これは、初期の教団でやっていたと言われていますし、私はこのことを三十三家庭という韓国の幹部に会ってお尋ねしたところ、確かにやっていたと確認もしております。

しかし、これを延々やり続けるというのは、いかにこの文鮮明氏が並の人間でなくても無理ですので、ある時点からやり方変えて、合同結婚式をやって、文鮮明夫妻が司式をした祝福と呼ばれる儀式に信者たちが参加することによって、この儀式が成立し、浄化のプロセスが成立するというやり方になりました。信者たちが少ないときには、文鮮明夫妻が自分たちの霊感によって、あなたとあなたが合うのではないかという形で、マッチングを行っているときもありました。

しかし、このやり方については、批判的な意見もあり、大体において自分たちの子供とか幹部の子供たちが、「こんな形で相手を決められてはいられない」と言って、結局は一般の信者に関しては強引に決められますが、上のクラスの人たちは相手を適当に選べるようにもなっていきました。

こんな感じで教団が成立していきますが、二〇〇一年に統一教会は地上天国を完成したと宣言します。これを天一国と言っています。そして、統一教会の信者たちは、この天一国というバーチャルな天国に入らなければいけないと言われており、これを入籍すると言っていますが、入籍の基本料として一四〇万円支払わなければいけません。これを、金集めと言えるかもしれませんが、こういうことが実際に行われています。二〇一二年に文鮮明が亡くなります。子供たちで跡目を巡って争いましたが、最終的に母親の韓鶴子という人が教団の総裁になっていきます。現在は天の父母様聖会、ここに世界平和統一家庭連合、天宙平和連合、世界平和女性連合という、この三つの大きな団体が束ねられていて、その下にさまざまな団体がついている状況です。

宗教としての弱さを強さに換えた政治宗教化

統一教会がなぜ日本で教勢を拡大できたのか。統一教会のキリスト教、あるいはキリスト教系新宗教としての実力というのは、私は大したことはない、むしろ弱い宗教だったと思っています。弱い宗教であるからこそ、自分たちを大きく見せる、あるいは本物であるように見せる、この「擬態」という手段をさまざまな形で成していくわけです。

日本に来たときに、自分たちでキリスト教と言いますと、正当なキリスト教から批判を食らいますので、統一原理ということを表に出していきます。宗教と科学の統一とでも言うのでしょうか。ですから、六十代とか七十代前半ぐらいの方々は、学生時代、原理研究会がキャンパスの中で左翼学生に対抗して、統一原理などを黒板を出しながら講義していた風景がご記憶にある方もいらっしゃるのではないでしょうか。昔は正体を隠していません。学生運動の時代は、宗教と科学の統一ということを言っていました。

しかし、ここで統一教会はもっと活動を変えていきます。一つは、国際勝共連合というような形で、政治運動を擬装していく。あるいは、日本の民俗宗教を擬装することで、北海道の十勝地方にある天運教という教団を乗っ取り、天地正教と名前を変えて、ここでいろんな壺とかを売ってくような団体を作る。明覚寺商法と非常に近いのです。あとは、市民運動とかＮＰＯを擬装しながら政治家に近づいてく、こういうやり方を取っていくわけです。この擬装、擬態のやり方が非常に巧みです。

この事業多角化ということですが、布教のやり方とか、資金調達のやり方とか、マーケティングのやり方とか、宗教団体としては考えつかないような多角化経営をやっていきます。経営学的にはポートフォリオ戦略と言うらしいですが、うまいやり方だと思います。

あるいは、日本、韓国、アメリカ、その他のことですが、韓国というのはメシアが生まれた国であり、これをアダ

ム国としています。日本は韓国を植民地化した国であり、アダムを堕落させた罪深いイブ国としているわけです。なので、日本は金のなる木の扱い方をされて、罪を償うために韓国に常に金を送り続ける。韓国はその金を使って小財閥のような活動をし、アメリカでもロビー活動のようにやっているということであります。

統一教会とは、生まれたときは新宗教ですが、だんだん成長していくにしたがって、多額のお金を集めるようになってきます。霊感商法でお金を集める、あるいは合同結婚式に参加する人からお金を徴収する、あとは、中高年の方、山上容疑者のお母さんが韓国のセミナーに何度も行っていたと言われていますが、この清平修練苑に参加して、先祖の霊の恨みを解くというような形で、現在は四三〇代までさかのぼって先祖の霊の恨みを解かなければいけない。これ、四三〇掛ける一世代三〇年を掛けてみてください。どのくらいさかのぼるかということ、日本は縄文時代になります。その時代、日本と韓国にどのくらいの差異があって、どのくらい民族が入り混じっていたか、もう訳が分かりません。

四三〇代まで先祖の恨みを解けというのは、実はアメリカでもやっている話です。アメリカで四三〇代までさかのぼったら、アメリカは二百数十年しか歴史がないわけですから、一体どこに行ってしまうのか。統一教会の信者になってしまうとそういう発想はやはり起きないようです。先祖が苦しんでいると言われれば、それを鵜呑みにしてしまいます。

話は後半になりますが、宗教としての弱さを隠す、弱さを補うためにどうしたのか、韓国の独裁政権朴正熙、一九六〇年代、クーデターで政権を奪取しましたが、北朝鮮への対抗のために、共産主義に徹底して戦う勝共運動を展開します。統一教会はこの勝共運動の先兵として、韓国でこの朴正熙に使われていたわけです。そして、朴正熙と岸信介、笹川良一との関係を使いながら日本に入ってきます。統一教会の本部に文鮮明が来て、岸信介、他と会合したりしています。

このラインが、今メディアで報道されている、岸信介から安倍晋三元首相に至る、この安倍家三代のラインなわけです。非常に細かすぎる説明となるのですが、岸信介、福田赳夫、安倍晋太郎、安倍晋三に至るまで、清和会の要職に就いた人間は、統一教会とかなり強いパイプを有していて、いろんなイベントに参加するだけではなくて、具体的な政治運動、政治活動をやっていたわけです。これが現在まで引き継がれているということです。

本来は対共産主義の勝共活動をやっていたのですが、一九九一年にこの文鮮明が、あろうことか、自分の生まれ故郷である北朝鮮に行って金日成と電撃的な仲直りをしてしまいます。そして、これから北朝鮮の観光や自動車産業の分野に対して自分は投資をすると言ってしまいます。文鮮明は韓国の財閥でアメリカにも口が利くんだみたいなことを言い、金日成と握手をする。その後、ゴルバチョフとも握手をします。そうすると、日本の勝共運動の担い手たちは、統一教会は反共ではなかったのかという話になりますが、実は反共ではないことが徐々に分かってきました。しかも、東西の冷戦体制が崩壊して以降、日本で反共を言う必要性もあまりなくなってくるわけです。

そこでどうしたのか、反共運動以上に、要は清和会の保守的な政治家の考え方、日本主義、あるいは家族主義、これに寄り添うような形で保守的な政治運動を展開していき、これは自民党のフロント団体のような活動をしていくわけです。そして、安倍晋三元首相は統一教会の雑誌とかイベントにも出て、今回このような結末を迎えてしまったということであります。

統一教会と自民党の政治家に関しては、今盛んに報道がされており、多分ほぼ三人に一人くらいは何らかの形で関係があるのではないか言われています。なぜ結びついているのか、これもいろいろ指摘されているように、統一教会が選挙協力という形で無償のボランティア、信者を派遣して、ビラ貼り、電話かけ、はがき書き、その他、動員されて、「誰々先生、頑張ってください」みたいな声を出したりするということがあります。資金力のない弱い政治家にとっては、この選挙協力というのは極めてありがたいので、これをずっと使ってきた、こういうことがあります。

では、自民党としてのメリットは何なのか。先ほども申し上げたように、いわば政党自体が保守的な価値観であるとか、家庭が大事とか、こんなことを戸別訪問で訴えたり、あるいは自治体に出向いて何か言うのは、非常にやりにくい面があります。そこを自民党に代わってやってくれる団体なわけです。こういう統一教会のフロント組織に依存して、地域の条例を作るような自治体、家庭を大事にしましょうという自治体もあります。

統一教会はそういった自治体に食い込んでいき、さまざまな機会を通して自前で講座なんかも開いてきます。そこに一般市民の方が入ってくると、そこで布教活動をやっていくわけです。統一教会の布教のやり方は、宗教に入りませんか、というようなやり方はほとんどやっていません。霊感商法とかは、あのときにかなり批判されたので、むしろ家庭を大事にしましょうとか、市民講座とか、さまざまな入り口を用意しておいて、そこに入ってきた人に対して、さらに入りたいという人に統一教会の教えを説いていく、いろんなセミナーに誘ったりする、こういうやり方であります。

さらに、今回参議院選挙では井上義行さんという方が参議院の議員に当選したわけですが、この人が受けた組織票は、その前の参議院選挙では宮島喜文さんという人がもらっていたわけです。こういった話は、この人に票を分けてあげた伊達忠一さんという北海道選出の元参議院議長が、電話の取材の際に話してしまったわけです。

私は北海道のローカル局であるＨＴＢの取材記録から確認していますが、伊達さんという人は臨床検査技師の、要するに業界団体票は持っているわけです。自分は政治家を引退するからこの後釜に宮島さんという日技連の元会長をつけようとしたのですが、どうもこの業界団体票だけでは足りないから何とかしてくれないかということを、安倍晋三元首相にお願いしたところ、二〇一六年ではもらえました。今回も同じようにお願いしたところ、だめだと拒否されてしまった。自分にはこの井上義行という人間がいるから、これで行くのだ、このように説明されたということで、宮島さんは泣く泣く立候補をやめたという話を伊達忠一さんはべらべらしゃべってしまったわけです。伊達忠一さん

という人は人のいいおじいちゃんみたいな感じの人で、政治家としてはそれほどの悪人ではないのでないかと私は思っていますが、こういうことになってしまいました。

これは、組織票を差配したのは安倍元首相だってことがわかっているのですが、ではどのぐらいの票が集まるのかを『朝日新聞』他、いろんなメディアにおいて、全国の自治体で統一教会の施設があるところ、ないところ、比べまして、あるところで、二〇一九年の参議院選と二〇二〇年の参院選で、どれだけ井上義行氏の票が増えたのかを調べています。結果的に六万から八万という票を統一教会は用意できることが、はっきりしています。

現在、いろんな宗教団体がありますが、明確な組織票を持って政治家を輩出できるのは創価学会だけです。他のところは、宗教団体は推薦、後援、支援という形で一応出しますが、団体、教団としてこの人に全員票を投じなさいと、こんなことは言えないわけです。それを言えるのは創価学会、公明党、幸福実現党、統一教会だけです。

結果的にこういう形で井上さんは当選してしまうわけですが、この方は日蓮宗の檀家の方であり、日蓮宗からも推薦を受けている方です（『中外日報』七月一五日付）。井上さんは統一教会の教会に行きまして、統一教会の賛同会員です。しかし、日蓮宗の檀家でもある。政治家は複数の宗教団体にまたがって活動している人は珍しくないので、こういうこともあるのかもしれませんが、日蓮宗として政治家の推薦という制度や人選に関して再検討を要するのではないでしょうか。

おわりに　宗教不信の時代に備える

ここから最後の話になります。政治不信・宗教不信を超えるためにということですが、岸田内閣の支持率が急落しているのは、皆さんご承知のところだと思います。岸田首相は丁寧な説明と、いわば統一教会と明言していませんが、縁を切るという方針を出しているわけです。加えて、各省庁連絡会議というのを設置し、ここには法務省と警察庁、

消費者庁、内閣官房が参加して、九月初旬から一か月間、霊感商法、統一教会関連団体の被害相談を受け付けるということを決めております。だから、こういう窓口はできるのでしょう。

しかし、これはうまく機能するのか。つまり、相談した後は相談で終わりなのか。被害が一千万円とか一億円ある人が、相談して終わりなのか。どうやってこのお金を取り戻すのかという話になったときに、いわば民事裁判をやるのか、あるいは警察、検察が統一教会関連団体を捜査して、資産を確保して何かをしない限り、被害は弁済されない、保障されないわけです。恐らくそんなことは何も考えてなくて、ただ相談窓口を設置して勘弁してくださいということではないかと私は考えております。

何よりも、対応の機関に文科省が入ってないわけです。宗務行政は文化庁宗務課が所轄ですが、文科省が入ってない、つまり統一教会、現在は世界平和統一家庭連合と名前を変えましたが、家庭連合の宗教法人、これについて何の議論もしないのかということです。明覚寺に対して文科省が宗教法人の解散を要請して、裁判所において解散させています。

つまり同じことをやっていても、解散させられるところもあれば、解散させられないところもある。解散させられないところは、政治家とのパイプが極めて強いからであることは誰の目にも明らかになりました。これでいいのか。岸田政権が何もしないでいれば、政治不信が非常に強くなるのではないのかと思います。

まだメディアではあまり言っていないことですが、宗教不信というのも私は高まるのではないかと思っております。これはオウム真理教事件のときもそうでしたが、オウム真理教の余波を受けた形で、伝統教団、新宗教教団で新しく信者を獲得するべく布教していく、獲得していく、これが極めて厳しい状態になっています。かろうじて勢力を維持しているのが創価学会くらいで、多くの教団は信者の高齢化や減少を迎えております。伝統教団もまさしくそうであり、今後これが加速化してくのではないのかとも思います。

統一教会で問題になっているのは高額献金、あるいは霊感商法ですが、この献金というものに対して、宗教界から発言があってしかるべきだと考えています。では、どういう形で布施や、喜捨すべきなのか、あるいはそういったものを受け取るべきなのかに関して、お気持ち次第と従来言われていますが、それでは一般の人は納得しないので、要はこういうことが布施の相当性ですと、私はもう少し明確な言い方をしていかなければいけないのではないのかと思います。

そして、政治と宗教の癒着。癒着と言うと悪い言い方になってしまいますが、いわば宗教団体が政治家を支援するとか後援することに対して、納得がいかない一般の方が非常に増えていると思います。そうしますと、支援するとか、後援するとか、推薦することの意味合い。これは従来、慣行的にやってきたわけですが、これを今後どうすべきか。

さらに、宗教批判ということが、日本ではなかなかしにくい、これがタブーとされている由縁です。今回の旧統一教会に関しては批判されていますが、明確に「宗教としておかしいんじゃないか」と言う人は、あまり表に出てきていないですよね。しかし、私は宗教界の方から、旧統一教会は宗教としておかしいのではないか、ということを言った方がいいと思います。カトリック団体は、旧統一教会はキリスト教ではないと言っているんですね。この言い方はいいのですが、「キリスト教じゃない」「○○じゃない」ということではなくて、「宗教としておかしいのではないか」という、踏み込んだ言い方はできないのかなということです。

それを言っていかないと、結局、日本の一般市民は、統一教会、宗教団体、伝統宗教団体の区分、あるいは境界が一体どこにあるのかということが分からないまま、宗教全体が信頼できない、信用できない、ということになっていくのではないか、と私は考えております。

以上、旧統一教会のあらましについて概観に過ぎないのですが、お話しいたしました。最後の論点は宗教不信を解きほぐす役割を現代宗教が求められているということで、この点において明確な声明を出している教団はないという

ことを指摘しておきたいと思います。

失礼いたしました。私の話としては、ここまでにさせてください。

司会　先生、貴重な御講演まことにありがとうございました。それでは皆さんから質問を受けたいと思いますので、（Zoom上で）声を出していただくか、手を挙げていただくか、ちょっとアクションしていただきたいと思います。最初に、軽く私の方から質問させて頂きたいと思います。きわめてテレビ的な関心からお聞きするようで申し訳ないのですが、安倍元首相が殺害された時にある宗教団体が関わっている、という話がまずニュースで出ましたけれども、その時、先生はすぐ統一教会と着想されましたでしょうか。

櫻井　ネットでは、すぐ統一教会の名前が挙がってきたんです。それを土曜日（事件の翌々日）の段階で書いたのが『現代ビジネス』でした。要するに、日曜日が参議院選挙なので、統一教会と暗殺事件が関連させられると、恐らく投票行動にも影響を及ぼすであろう、とメディアがいろいろ考えて、土曜と日曜日には、宗教団体の話は一切出しませんでした。そして月曜日に、旧統一教会が自ら、山上容疑者の母親が入っていた宗教団体として、当法人が関わっていたようであります、といきなり記者会見をしました。それ以降に、ようやくメディアが安心して旧統一教会との関係性を発表するというようなことがありました。

司会　ありがとうございます。ああ、なるほど、そういうことですね。

あと、私が若い頃、オウム真理教について世間が問題にし始める少し前に統一教会のことが騒がれ始めたような記憶がありますが、霊感商法も問題視されていましたが、世間的には桜田淳子さんの合同結婚式出席というのが大きな

トピックとしてあげられると思います。しかし当時、一般的には自民党と統一教会が密接な関係にあるとは認識されてなかったんですね、私のような学生に毛が生えたような世代には。この統一教会と自民党、わけても今でいうところの清和会中心に関係が深かった、ということについて当時は秘密にされていたというとこもあるんでしょうか。あるいは統一教会というあからさまな名前ではない形で結びついていたんでしょうか。

櫻井　統一教会のことは、霊感商法に関して言うと、『朝日ジャーナル』で有田芳生さんがかなり書いていたり、『週刊文春』の方で書いていたり、要するに週刊誌レベルでの報道はあったんです。そこには、国際勝共連合の活動に自民党が関係しているというようなことも言われていたわけですが、やはり一部の方にしか知られていなかったということだと思うんです。今と比べれば、圧倒的に情報量が少ないと思います。現在は新聞とか雑誌だけじゃなくて、ネットニュースの力というのは非常に強くて、これが情報網を非常に拡大していくんですね。この情報量という点がやはり三十年前とは全然違うんじゃないかと思います。

司会　はい。ありがとうございます。私からは以上です。他に何かご質問ありませんでしょうか

質問者①　先生、今日はありがとうございました。

長崎に日本イスラエル教会という施設があるのですが、これは統一教会と何か関係があるのでしょうか。何か似たようなことを言っているような気がしまして。もしご存じでしたら、教えていただきたいのですが。

櫻井　直接は知らないのですが。日本イスラエル教会は何を言っているのですか。

質問者①　やはり、信者にお金を韓国へ送らせる、というようなことをやっているようでございます。また、離婚することは絶対に許さないぞという教えがあるそうです。

そのイスラエル教会の神父さん、牧師さんになるのかな、ちょっとよく分からないのですが、そこの方は一応日本人のお名前で出ているのですけれども、非常に韓国とつながりが強いようなことを信者には言っているようでございます。

櫻井　ああ、そうですか。日本イスラエル教会という名称ではネット情報を検索しても直接にはヒットしませんでした。統一教会との関連、それもちょっと考えられるかもしれませんけれども、韓国系教会というのが、実は日本にもうかなり入ってきているんです。日本のキリスト教というのは、高齢化が進行していて、信者さんだけではなくて牧師先生方も高齢化して、不在のところが結構あります。そういう教会にどんどん韓国系の方々が牧師として入ってきているということもありますし、韓国の純福音キリスト教会などが、日本に三十近くの支部を拡大したりと、様々な形で韓国系キリスト教会がすごい勢いで日本に入ってきているんですね。

だから、その活動の中で、いわば韓国に人を連れていくとか、あるいはいろんな面でお金を返す、みたいなことはひょっとしたらあるやもしれません。

質問者①　はい。それとあと、デイビッド・チャンという人物がおりまして、この人がまたキリストの生まれ変わりだ、というようなこと言っているみたいです。日本の中でブラック企業を経営していて、信者をそこで働かせるというようなものがあったりします。これなんかも、統一教会と関係があるのか、ないのかも分かりませんが、先ほど先生がおっしゃったようなものの中の一つということなんでしょうね。

櫻井　そうですね。韓国には自称メシア、キリストの生まれ変わりである、という人は十人以上いらっしゃいますので、その人たちが小さい自分の企業団体を作って、そこで信者を働かせるということはあります。

また、以前にセウォル号事件がありましたけれども、そのフェリー会社を所有していたユ・ビョンオンという人も、こういったキリスト教団体のオーナーであり、指導者でした。こういうことは、全然珍しくないんですね。だから、統一教会というのは、こういった自称メシアであり小財閥のオーナー、という位置づけなんですよ。日本は宗教団体としてかなり発展してきたので、全然イメージが違うのですけれども。

質問者①　はい。どうもありがとうございました。

司会　ありがとうございました。他にございますでしょうか。

質問者②　勝共連合のことについて少しお話を伺いたいのですが、連合を作るにあたって、岸信介さんとか笹川良一さんが関わっていたというようなことを、今日お話しいただきました。一説には、戦後、岸さんや笹川さんがＣＩＡのエージェントであったために、勝共連合が作られたのではないかということでした。先生もおっしゃいましたが、詐欺罪の適用だとか、統一教会が受けないだとか、今もって文科省の範疇に入っていないということがいまだにあるということは、アメリカの影響というものがあるのかどうか、お考えはいかがでしょうか。

櫻井　そこまで行くと、なんか陰謀論的になっちゃいますよね。私もその話を聞いたことがあって、要するに、岸信介以降、安倍晋三元首相まで含めて、コードネームを持っているんだとか、こういう話があるんだけども、ちょっと

それは想像たくましくしすぎなんじゃないのかなと思います。これはなかなか、実証ができないので、陰謀論的な世界とちょっと接してきちゃうのではないかという気がしますね。

質問者②　はい、ありがとうございました。

質問者③　本日のご講義、どうもありがとうございました。

統一教会の「きょう」という字についてですが、マスコミでも先生も教えるという「教」を使っていらっしゃいますが、協力とか協賛の「協」という使い方もあるようで、どちらが正しいのでしょうか。教えてください。

櫻井　はい。これは統一教会をどう評価するかということに関わってきます。アソシエイションや協力の「協」を使う方が正しいと主張される方は、特にキリスト教関係の方に多いんです。その言い分は分かるのですが、私は普通に、チャーチの「教会」を使っています。これは、世界基督教統一神霊協会はアソシエイションの「協会」なんだけれども、これを英語化した場合、ユニフィケーション・チャーチになるんです。このユニフィケーション・チャーチという名称は世界中で使われていて、統一教会の人たちも自称統一教会と言っていたわけなので、そこを私は使って、チャーチの方を使っているということです。ですから、どっちが正しいのかっていうのは、なかなか言い得ないところがありますね。

質問者③　ありがとうございました。

質問者④　先生、ありがとうございました。

まず先生がなぜ日蓮宗の僧侶を志されたのかということ、あと、日蓮宗の魅力についてお教えいただければなと思います。講義とは関係ないかもしれませんけれど、よろしくお願いいたします。

櫻井　これは、簡単にはやっぱり語れないところがありまして、私、途中で僧侶への道を断念するかもしれないし、それは分からないのですけれども。私の父親、本家が日蓮宗であったということで、父親の葬儀をするお寺を決める際に、私は山形県の上山市の出身なのですけれども、そこに日蓮宗の寺院―妙正寺がありまして、そこで父親の葬儀とか、いろいろやっていただいて、やはり人の生き死にということには、寺院の関わりは非常に大きいんだなということは実感として分かりました。

あとは、『月刊住職』という雑誌にもう百十何回連載しているんですけど、そういった中で仏教のカルチャーにかなり接してきたっていうのはあると思います。

あとは、私も六十を過ぎまして、同年輩のお上人の方々もいらっしゃるかと思うのですが、やはり人生の晩年のこととか、いろいろ考えることはありますよね。そんなときに何をベースに考えていくのかっていうことが重要になっていくと思います。私は仏教がベースの一つになるのじゃないのかなと思っているんです。

それがなぜ日蓮宗なのかっていうのは、たまたま檀那寺だったということと、いろいろお話を聞く機会とか、これまで親しくしていただいたお上人がいらっしゃるっていうことで、日蓮宗にものすごく魅力があるから、これしかないっていう形で入っているわけじゃないなんて言ったら失礼ですけれども。最初からこれしかないっていうのはあり得なくて、私は危うい考えなんじゃないかなと思っているのです。

私の専門は比較宗教社会学です。そのため、仏教だけではなくて、キリスト教とか、他にも比較するし、日本だけ

ではなくタイをはじめとする東アジアなど、いろんな宗教、地域を比較しながら見るわけなんですね。その中で、宗教とは何なのかとか、仏教って何なのかということをやはり考えます。ただ、考えるレベルではいろんな形で比較をするのですけれども、結局一つの道に入っていくことを考えると、やはり門をたたかなきゃいけないわけですよね。門を全部たたくわけにいかないから、どこからかしか入れない。そのどこかっていうのが、私の場合はたまたまご縁をいただいて日蓮宗であったということなんだと思うんです。

このご縁というのは、私が選択したということも半分あるでしょうけれども、まさに縁の中でできたことなんじゃないのかなっていうふうに思っております。信仰とか、そういう形で、全部自分が決めてとか、自分が選択したっていうふうに考えすぎることは、いろんな意味で適当ではないだろうというところもあります。さまざまな要因とか条件とか、いろんなものが重なって、私たちの道筋はできていくと思うのですけれども、それを意識化しつつ、しかし、これが必然とも思い込まずに、その都度その都度で考えながらやればいいんじゃないのかなという。私はいま、プロセスにいる人間でありまして、皆様のご指導をよろしくお願いしたいという段階です。

質問者④　ありがとうございました。日蓮宗にご縁をいただいて大変うれしく思っております。

司会　そうですね。大変今の先生のお話は含蓄があるなと思いました。宗教社会学者の方が宗教に関わるっていうのは意外に思うところも正直ありまして、実は宗教に対して批判的な部分もおありなんじゃないかなというふうに思っておりましたので。

櫻井　そのことに関してもう一言付け加えさせていただくと、日本では宗教のことを、やはり信仰という形で捉える

ことが非常に多いと思うのです。信仰っていうのは自分の帰依する対象を一つに定めて、自分はこれだけを信じるんだと、他のものはそうじゃないんだっていう形でやると思うのですけれども、これも信仰の捉え方とかっていうのは、ちょっと狭いんじゃないのかなっていう気もしております。

むしろ、私は統一教会の研究をしていて思うのですけれども、統一教会の信仰のあり方っていうのは自分を消すんですよね。徹底して自分を消すのです。自分で考え、いろいろ行動するから間違うんだと。そうじゃなくて、真理に向かって救いを明らかにしてくれる人の指導に従って信仰していくんだ、という発想なんですよ。これは、信仰とか宗教の捉え方としてかなり問題があるというふうに思っています。学問もそうですけれども、実践しながら、その人が自由な発想を持っていかないのであれば、私は意味がないんじゃないのかなというふうに思うんですね。

囚われることが信仰っていうわけじゃなくて、何かある種の構えとか型から入っていくことによって、別の囚われていたことを捨てていくというか、脱ぎ捨てていくというか、こういうプロセスがあって、いろいろやってくうちに、その人は自由にものを考えたり、振る舞えるようになるんじゃないか。こういう体験をすることが、私は宗教なんじゃないかなっていうふうに自分なりに考えていて、そういう意味で私の学問と今やっていることは、そんなに離れちゃいないのです。

質問者④　ありがとうございます。すごくいいお話でした。

司会　他にどなたか、ございますでしょうか。

質問者①　すみません、もう一度、先ほど聞きそびれしちゃったんですけれども、日韓海底トンネルのことなんです

が、統一教会は非常にこだわっていますよね。あれは一体どういうことなんでしょうか。どういう利権があるかとか、教義的に何か関係があるのかとか、いろいろ想像しちゃうんですが、何かご存じでしょうか。

櫻井　基本的に意味のない荒唐無稽な話だというふうに思っているのですけども、これは、一九七十年代の後半から八〇年代にかけて統一教会で言い出しています。要は日本の東京からプサン、そしてピョンヤン、中国を通ってベトナムであるとかヨーロッパであるとか、国際ハイウェイ構想っていうのを言っていたのです。要するに、文鮮明は、自分はこういう大きい構想を考えられる人物であるということを押し出そうとしていた、というのが一つあると思います。

そして、その日韓に海底トンネルを掘れるかどうかっていうのは、誰がそれを許可するのかということの問題も含めて非現実的なのですけれども、こういうアドバルーンを上げると人が集まるのです。政治家も集まりますし、地元の起業家の人たちも集まります。そこで人を集めることで、また統一教会および関連団体は人脈を拡大できるのです。だから、そこの狙いっていうのが、私は結構あるのじゃないのかなっていうふうに思うんです。

実際、私は唐津に行きまして、試掘抗にちょっと入ってみたんです。何の意味もないただの見せものですよ。要するに、自分の敷地にただ横穴掘っただけなのです。だけど、なんかこういうことを言うと、いろんな人が着目してくれて、やっぱり人が集まる。人が集まると人脈ができて、金の流れもできちゃうんです。なんかそこら辺の機微っていうのを、文鮮明および統一教会の幹部たちは、かなり分かっているのじゃないですかね。

質問者①　では、本気で言ってるわけではない、という先生の見立てでよろしいでしょうか。

櫻井　本気で言っているわけじゃないと思っています。しかし、そこに関わっている地質学者の人なんかは、本気の人もいました。北海道大学の名誉教授が関わっていた事実もありまして、私としては残念ですね。

質問者①　ああ、そうなんですか。ありがとうございました。

質問者⑤　先生、ありがとうございました。

講演の後半部分で、宗教界への不信感ということが懸念されるというお話がありました。旧統一教会の信徒による高額献金の件をはじめとして、宗教界に対して不信感が募るのではないかということです。その際、先生がいまお考えになられる喜捨される側、献金や布施を受け取る側のキーワードは、幾つかありましたらお教えいただけますか。

櫻井　キーワードは、献金や布施を受け取ったときに私たちが使わなければいけない、「お預かりいたします」という言葉に象徴されるように、これは自分のものではないわけですよね。仏法僧に対して喜捨され、預かる僧侶は託されているわけなので、これをどういうふうに活かすのかっていうことを、やっぱり考えなきゃいけないわけなのですこの言い方とか関係について、どうも一般的には理解されていないんじゃないのかなと思うんですね。僧侶がなしたある種サービスに対する対価だと思われています。対価であれば、自分がどう活用してもいいんじゃないかみたいなことなんですけれども、預かるということは恐らくそういうものではないでしょう。

もう一つは、布施としてこちらに向けられたものには、布施をした方のいろんな気持ちがやはりこもっているわけなので、この気持ちにどう対応するのかっていうことなのじゃないでしょうかね。その気持ちに対して誠実に対応するのかどうか、それはその後のお金の使用方法とか、それを見れば明らかになってくることだとは思うのですけども。

現時点ですぐ思いつくのはこのくらいですかね。他にもいろいろあると思いますが。

質問者⑤　はい、ありがとうございます。

質問者⑥　櫻井先生が今まで蓄積されてきたことをはじめとして、いろいろと貴重なお話をいただきまして、ありがとうございました。

私たちは今回の講演のように統一教会のことにつきまして、やはりこれからも学んでいかなければならないと思うのですが、テレビで流れるマスコミの情報っていうのも非常に大きな情報源になります。

この中で見ておりますと、長年関わってこられたコメンテーターの方もおられれば、言ってはなんですけど、にわかといいますか、ちょっと周りを惑わすような方も見られます。

そういった中で、先生の目から見て、正しいとまでは言いませんけれども、この方のご意見はまっとうだなという方を、二～三人教えていただきたいということが一点です。

もう一つ、重ねた質問で恐縮ですが、カルト団体を人権侵害する団体と定義づけるとしますと、その一方でネット上では、ネットカルトとでも言いますか、人権被害の応酬となっているような感じがしますけれども、こういう世の中を見て、先生はどういうふうにお考えになるでしょうか。

この二点です。すみませんが、よろしくお願いいたします。

櫻井　はい、どうもありがとうございます。

第一点ですけども、弁護士としてよくテレビや新聞に出られている紀藤弁護士、あるいは山口広弁護士ですよね、

このお二方は霊感商法の被害対応をされてきた方で、もう三十年以上ずっとやられています。被害者サイドに立っていろんな発言などされていますし、実態も一番分かっていらっしゃるので非常に信頼できると思います。自民党政治家と統一教会との関係であれば、鈴木エイトさんというジャーナリストの方の情報が正確です。

ただし、紀藤先生と私はちょっと考え方が違うところがあります。紀藤先生は統一教会という局所的な問題対応だけじゃなくて、カルト対策っていう形での法的な網をかぶせる。つまり、包括的な法律をつくることはできないのかっていう立場なのですね。私は、それは難しいだろうと考えています。

それはなぜかというと、すでにフランスでは反セクト法っていうのが二〇〇一年に成立しているわけなのですけれども、フランスはやはり、国家が国民の自由を守るという意思が非常に強いですね。その際、信教の自由、あるいは宗教的な活動の自由よりも、市民の自由の方がより大事だという、フランス革命の精神がやはりあるので、宗教に対して介入していくのは当然という発想があるわけなんです。ところが、日本にそういった精神的なベースがあって政策が作れるのかっていうことなのですが、私は、これはなかなか難しいと思っています。

そして、そのフランスの反セクト法ですけれども、実際いろんな基準とか作られていますが、これを具体的に適用するとなると、やはりかなり難しいんですね。これはなぜ難しいかというと、同じ教団、宗教の中に被害を訴える人とそうではない人が出てきます。この場合、どちらの声をどういうバランスで団体活動を評価していくのかという話が出てくるんですね。ですから、フランスの反セクト法を適用されて解散させられたような諸団体の話を私は聞いてないのです。ですから、象徴的な意味で法律は確かに存在しているのですけれども、現実的な法律、政策にはなっていかないんじゃないかというところがあります。その意味で、このフランスでできている法の建物を日本にも建てるっていうのは、実はとても難しいと理解しています。

例えば政教分離であっても、日本は憲法で明確に決めているわけですよ。憲法のレベルでは政教分離なのだけれど

も、実際の政治過程の中では政教密着なんです。ここに関してあまり矛盾を感じないで、いろんな憲法学者の人が議論してきたりとか、宗教学でもやってきたりしたわけですよ。このような精神構造とかエスプリの下で、反セクト法的な、いわば宗教に対して介入していきながら、個人の自由とか精神の自由を守らなきゃいけないのだとまで進めるのは無理なんじゃないか。少しこの点を長らく説明したのですけれども、論者として具体的には同じ把握をしていながら、どういう対応したらいいかっていう点では、やっぱり立場が分かれるとこなんですね。以上、紀藤先生の例でお話しいたしました。

二番目の話、ネットカルトなのですけれども、これはいろんな陰謀論も含めてなんですが、世の中に膨大な情報が出ていて、自分がファーストハンドで確認ができない、真偽を確認できないような情報がいっぱいあるんです。私たちはその情報に基づいて議論することにかなり慣れてきてしまっている。だから、誰かが流した情報で、自分が嘘か本当か分からないんだけど、それを信じ込んで、相手を自分の正義感によりながら批判するようなことが出てくると思うんですね。

これに対してどうしたらいいのかということなんですけれども、基本的には自分で確認できない情報に関してはもう留保せざるを得ないということと、そういう情報だけでは議論を構成しないということが、大事じゃないかなと思っています。つまり、分からないことに関して、スタンスを決めてやるということをやめて、分からないことは分からないっていう形で議論していくのがいいんじゃないのかと思うのです。

このことは、情報社会に対して我々がどのように対応してくのかという一つの方策だと思いますし、また、自分が拠って立てるところの現場と情報を持つということじゃないかなと思っております。例えばこの統一教会の問題でしたら、統一教会って一体何なのか、どういう問題があったのかということを、単に本や雑誌で読んだとか、テレビで情報を聞くというだけじゃなくて、被害者の方とか実際の方から生の声で聞くと、やっぱり見え方が変わってきます。

ですから、檀家の中で巻き込まれてしまったような方がいらっしゃるのであれば、その人の肉声を大事にしながら、どういうふうに見ていったらいいのかという考え方をしていけばよろしいのかなと思ったりもいたします。

お答えになっているでしょうか。

司会　ありがとうございました。他にありますでしょうか。なければ、所長の方から質問させて頂きます。所長、どうぞ。

赤堀　はい。よろしいでしょうか。

講演資料の中に、『美しい国　日本の使命』とあり、これは久保木修己氏が著者ですね。また、安倍晋三元首相も『美しい国へ』という書籍を出していました。「美しい国」という言葉は統一教会に関係するのでしょうか、どのようにして出てきた言葉かどうかは分からないのですが、突如出てきた言葉の根拠が何となく分かったような気がいたします。

それで、この久保木修己氏についてお伺いしたいのですが、立正佼成会青年部の部長をしていて、一説には三十名ぐらいの会員とともに統一教会に入会したと。その後、日本における統一教会の初代会長になっていますね。そして現在は、先生ご指摘の霊感商法や合同結婚式以降、一つの転換期にある統一教会は、解怨献金ということを始めています。先ほど先生の講演でもありましたように、先祖供養を中心に据えているとのことでした。この辺に立正佼成会の仏教的な思想の影響は、見られるのでしょうか。

櫻井　私は、そこは切れているんじゃないかなと思っています。

赤堀　はい。時期的には異なっておりますもんね。

櫻井　はい。先祖解怨の一番の特徴は何かというと、先祖の恨みを解くということなんです。これは、供養じゃないんですよ。追善じゃないんですね。だから、これは仏教的な発想じゃないんです。

では、一体何かといえば、韓国のシャーマニズムだと私は思っています。例えば未婚で亡くなるとか、異常死をしたとか、思いをなくして亡くなった方に対して、クッという儀式で霊を下ろして、いろんなことを語ってもらって、その人の思いを晴らすという、これはハンプリといって、ハンは恨み、プリというのは晴らすという意味です。こういう儀礼がやっぱりあるのです。この形に先祖解怨っていうのは一番近いのです。

だから、統一教会は、亡くなった先祖たちはみんな地獄に行っていると言うわけです。これはおかしいですよね。霊山浄土に行ってなくても極楽に行っているかもしれないし、その人の功績とかやったことに応じて、しかるべき場所に行っているはずなんですけれども、みんな地獄に行っているという前提から始まるのです。これは全くおかしい。仏教的ではないし、日本的でもないのです。

これがすっと入っちゃっているっていうことが、やはり日本の仏教観とか民俗宗教のレベルでもはっきりとしていないし、極めて曖昧な宗教意識なのですね。何かしなきゃいけないくらいのことは分かるし、祟りとか、そういうものを感じることがある。しかし、それを考えることが適切なのか、あるいは日本の宗教的な慣行の中であることなのかとか、なかなか反省的な思いにまでは至らないで、どんどん巻き込まれて行くんですね。

ですから、韓国のシャーマニズム的な儀礼が一九九〇年代の半ばから出てきて、それに非常に多くの日本人が巻き込まれて行ったっていうのは、私は、家族とか地域社会とか、その中から伝統的な宗教慣行がどんどん失われてきて、個人化してきてしまった中で孤立した人がターゲットになっていったんじゃないのかなとも思います。

久保木修己氏に関して言うと、この人は政治運動をやりたかったのです。宗教よりも政治運動をやりたかった人なので、反共活動という点で一貫しているんですね。そして、統一教会の中では主流派になれなかった人です。統一教会の主流派になったのは、古田元男という（元ハッピーワールド社長）ですけれども、この人はお金集めの才覚が一番あった人物です。文鮮明はお金を持って来る人が好きですから、久保木は政治のことばかり考えているからだめだと。古田のようにまず現金を持って来いっていう発想の人物だったんですね。

そして、結局日本の統一教会の中で主流派になっていったのが、霊感商法をやるグループだったわけです。政治や宗教のことを強調する人間が、どんどん脇に出されていって、久保木修己は『美しい国　日本の使命』を書いていますけれども、自分の幻想を抱きながら失意のうちに亡くなったのだと思います。亡くなる前にもっと反省して、統一教会に関する手記を残すべきだと私は思ったのですけれども、やはり久保木は頭の半分が統一教会なので、そこまではできなかったのかもしれません。

司会　どうもありがとうございました。

そろそろ予定していた時間となってまいりましたけれども、皆さんからの質問もまだまだあるかもしれません。先生には近いうちに、カルト宗教も含めて、継続してお話を伺う機会を設けたいと思っています。先生、またご協力をよろしくお願いしたいと思います。

櫻井　はい。ありがとうございます。

司会　それでは、櫻井義秀先生の特別講演会を終わらせていただきたいと思います。脱カルトの問題に関しましては、

櫻井先生もご存じのとおり、本宗では楠山泰道上人という専門家がいらっしゃいます。次回は楠山上人も交えて、話を伺う機会を設けたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

櫻井先生、本日はどうもありがとうございました。

櫻井　はい。どうもありがとうございました。

司会　それじゃ、お題目三遍唱えさせていただきまして、今日のこの会を閉じさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

南無妙法蓮華経。南無妙法蓮華経。南無妙法蓮華経。

どうもありがとうございました。